



## 秋の収穫祭

えっちゃん

協力隊員が作る

# 文岳イモ

協力隊2年目  
柴田 悦子



地域おこし協力隊の柴田悦子さん(二年目)は、令和7年11月2日(日)に、鴨沢地区の鴨沢文岳館において、大学芋「文岳イモ」の販売を行いました。本企画は、村の地域イベント「よってかっせーたばやま」の開催決定を受け、短期間での商品化を目指し、柴田隊員が考案・開発したものです。文岳イモ誕生秘話と当日の様子をお伝えします。



### 文岳イモ誕生秘話

イベント開催の情報を10月22日に知り、直近での準備・販売が可能である点を重視し、大学芋の製造が迅速かつ効率的であると考えました。当初は得意のサツマイモパイを検討していましたが、利用者数の予測困難性から材料費を考慮して今回は見送りました。

さっそく翌日には試作を作り、関係者に試食してもらって販売が決定しました。「文岳イモ」に使用されるサツマイモの苗は、村の農家さんから提供されたもので、それを畑で育てて作ったものです。本商品の販売目的は、営利追求よりも、地域イベントへの貢献および村の活性化の一助となることを目的としました。ちなみに「文岳イモ」のネーミングはTABANET.の中平さんにお願ひしました。

### イベント当日の様子



カウンターの奥では、ほっかむりにエプロン姿の柴田さんが笑顔で来訪者をお出迎え。畑で自ら愛情込めて育てたサツマイモ(安納芋やシルクスweetなど)を次々と揚げていました。小気味よい油の音と、芋の香ばしい甘い香りが文岳館の周辺に漂い、食欲をそそりました。



上野原 地域おこし協力隊 稲福さん



上野原で珈琲の焙煎をしている協力隊員の稲福さんも参加し、美味しい珈琲を提供。ほくほくのイモに甘い蜜が絡み、作り手のえっちゃんらしい、素朴で優しい味わいでした。ちなみに、最初のお客さんは、横浜から秘境を求めて丹波山や小菅村を訪れたという中学生ご一行。その後も村の方々や村外の人も続々集まり、揚げたての文岳イモを摘みながら、秋の景色を楽しんでいました。丹波山村の秋の収穫を味わった、穏やかな一日となりました。



# この秋冬、丹波山村が「舞台」に



## ミステリー再び

地域おこし協力隊の倉持です。村の観光振興のため活動しています。

この秋冬、私たち丹波山村が丸ごと舞台となる、ちょっと面白い、いや、ものすごく面白いイベントが再び開催されます！それが、村全体を使ったマダミスイブ「狼ノ村」の再公演です。

村まるごとの没入体験とは？

「マダミスイブ」や「イマージブシアター」という言葉、聞きなれない方もいるかもしれません。簡単に言えば、**参加者ご自身が物語の登場人物となって、事件の真相を解き明かす**という、ツアーです。

村の歴史や地域資源を活かし、主催のイマージブ・ラボが、この丹波山村でしか体験できない物語を創り上げてくれました。

他のイベントでは実現できない、この村全体を舞台に使うというスケール感！参加者の皆さんは、遠くに見えた村落へと迷い込む「ツアー参加者」や、因習の残る「村の住人」として、物語に参加することになります。映画でも演劇でもない、エンターテインメントです。

### 日帰りと宿泊、そして物語の完結

この「狼ノ村」には、日帰り型と宿泊型の2つのプランがあり、これが大きなポイント。日帰りだけ、宿泊だけでは、物語の全体像が異なり、両方参加することで物語を満喫できる仕組みになっています。

前回の日帰り公演に参加された方が、今度は宿泊型で再び来てくださるなど、リピーターも続出。同じプランでも配役が変わると全く違う視点で楽しめるため、日本中にあるマダミスイブの中でも、この「狼ノ村」は丹波山村だけの特別な体験となっています。



### 関係人口増加に繋がるイベント

「狼ノ村」の開催は、村外から多くの方を招き入れる絶好の機会です。このイベントが成功することで、丹波山村に興味を持ち、ファンになってくれる人々が増えます。そして、この村の魅力を全国に発信してくれる強力なサポーターとなります。村を訪れる人を増やし、丹波山村の関係人口を押し上げる、きっかけになると考えています。村の皆さまにはぜひ、物語を体験しに来てくれたお客様を温かく見守り、応援していただけると嬉しいです。